主編：李清凌、沈友益

中華民國史史料外編

廣西師範大學出版社

厦門大學圖書館珍藏
主編：季嘯風、沈友益

中華民國史史料外編

——前日本末次研究所情報資料

日文史料
第七册

廣西師範大學出版社

日、英、米、佛、伊五ケ國の共同通牒愈よ提出さる

漢口、上海の兩總領事から陳友仁、蔣介石兩氏に手交す

◇…十一日午後八時外務省公表

南京事件に關し四月十一日在漢口日、英、米、佛、伊五國總領事は、本國政府の訓令に基き、國民政府外交部長陳友仁氏に左の共同通牒を提出し、同時に在上海五國總領事は右通牒を國民軍總司令蔣介石將軍に通告せり

去る三月二十四日南京に於て國民軍が各國國民に加へたる暴虐行爲に依りて生じたる事態の迅速解決を期せんが爲め下名締はこゝに日、米、英、佛、伊國政府の訓令の下に、其の各國の在支外交代表者より貴下に對し左記の要求を提出すべきことを命ぜられたり、尚本要求は同時に國民軍總司令蔣介石將軍にも通告せらるべし

一、虐殺傷害侮辱並損害に付き責に任ずべき軍隊の指揮官及之に關與せる者に對し嚴重なる處罰を加ふること

二、國民軍總司令より文書を以て謝罪をなし該文書中に外國人の生命財産に對する一切の暴行煽動を行はざる旨の明約を含ましむること

三、人的傷害及物的損害に對し完全なる賠償を爲すこと

國民政府當局に於て速かに右要求に應ずる意圖を明にし、關係國政府をして滿足せしむるにあらずんば關係國政府は其の適當と認むる措置を執るの止むを得ざるに至るべし

末次研究所

五ケ國共同聲明書を發す

要求條件は穩當を旨とし

最小限度のものに過ぎず

南京事件に關し日、英、米、佛、伊五國政府は、國民政府當局に交付せる通牒に關し左の聲明書を發表せり

南京事件に關し日、英、米、佛、伊諸國民にして虐殺又は傷害せられたるものあり其の他多數の者は暴行を蒙り其の生命に危害を及ぼし掠奪並極端なる侮辱を受け又婦女子は名狀す可らざる暴虐を蒙り日、米、英の領事館は侵害せられ其の國旗の威嚴は傷けられ南京在住の總ての外國人の家屋及財産物は組織的に掠奪せられ又紛失せるもの少からず

日、米、英、佛、伊各國政府は斯の如く其の代表者及平和に適法の職業に從事せる國民に對して明かに豫謀せられたる暴行に鑑み責任ある國民政府當局に對し之が滿足なる匡正に付要求を爲すの必要を認めたり、而して列國間に協定せる要求條件は穩當を旨としたるものにして、此の際自國の威嚴と國際團體内の友邦に對する義務とを認識する何國の政府と雖も其の體面上匡正を爲し得べき最小限度のものに過ぎず

是等の要求は固より關係諸國政府が友邦と偕ずるに吝ならず、且つ其の親善協調の關係を繼續改善せむことを熱望する支那國民の主權又は威嚴を傷くるの趣旨にあらずして、寧ろ現在の友好關係を破壞し、且つ友邦列國民に對する支那國民の不信憎惡及兇暴を煽動せむとする行動に依て南京事件を惹起せしむるに至れる支那内外の勢力に對して之を行ふものなり

用意、細心過ぎて悲觀

交渉の前途却つて

一兎を追うて遂に一兎も獲ずか

南京事件に對する五ケ國の共同通牒は、愈よ十一日夜を以て支那側に手交されたが、その交渉相手を蔣介石氏の二説に分つた事は、既報の如くである、即ち五國公使團が武漢政府と蔣介石氏にのみ交渉を繼續して滿足なる成功を收めても、武漢側に何等の

◇…處置　を爲さざるときは同盟に對し抗議事項の末節に附加したいはゆる……「一一に應ぜざる場合、下名等本國はそれ〴〵適當と認む可き必要なる手段に出づる……」

旨を通告した趣旨が立たなくなりその面目を如何にすべきか又二の場合は何れを責任者として該抗議を敢行せしむべきか、殊にその間

◇…悲觀　的立場に置くものと觀られてゐる、即ち彼國としては國民政府部内の内訌が左右何れに勝敗を決するとしても、交渉の相手を失はざらんが爲め、細心の用意を以て兩者に同文の通告を發したものであるが、かくに問題なのは、一、蔣介石氏は右の抗議に對して誠意ある態度を採るとしても武漢政府は恐らくそこに何等かの理由を附して一言述ぶる所あるべく、殊に英米の確聲事件に就ては逆ねち的抗議ある事は極めてあり得る事と觀られてゐるので、此の場合列國は如何なる態度を採るか

二、武漢政府並に蔣介石氏が責任を轉嫁し合つて互ひに之れを受けざる場合、列國は果して如何なる措置を採るか

三、仮りに一の場合、彼國は蔣

日、英、米、佛、伊等關係五ケ國の損害程度並に利害關係が相異る所から、その際に乘じて支那側の態度全く煮え切らざるときは遂にのれんに腕押の狀態となり、之が

◇…解決　は殆ど絶望の外はあるまいといふのである、之れは畢竟關係諸國が餘りに利巧に立廻らんとして、即ち二兎を獲んとして遂に一兎をも得ざるに至るのではあるまいかとみられてゐる

末次研究所

2.3.271

上海報

南方政府勢力圏内の

米國人全部引あげ

北京米國公使より

各地米國領事に命令

（北京二十五日發東方電）本日米國公使マクマレー氏は南京の事變に鑑み南方政府勢力圏内駐在米國領事を通じて右地域居住米人に引上げを命じた

南軍の殘虐なる行爲

南京の我が領事館を荒したるその暴狀

（南京二十五日發岡領事發情報）二十四日午前七時頃より十一時半に亘り暴徒第二軍第六軍所隷支那兵約百五十名、騎馬、馬車等にて運搬品を用意し來り入り代り立代り制服制帽にて小銃を携へ當館に乱入して直に武力掠奪に移り一部は本務所及び館員館舎を一部は領事館を襲ひ森岡領事以下館員家族上海中の海軍士官水兵及び雜居中の男女在留邦人百餘名に向ひ既なく實弾を發射し或は銃劍を擬し甚したきに至りては足の病氣にて臥床中の森岡領事の寢台を剝き取りたる後ち枕元より前後二回實弾狙撃をなし或ひは婦人連中に對し幾回となく忍ぶ可らざる身體檢査を行ひ此れに附隨して數百人の無賴漢乱入し當館備品、本館及び館員の私有品及び引揚げ在留民の荷物を徹底的に掠奪してもつて余さず床板、便器、空瓶まで持ち去りたり

此の騒動中木村書記は右腕に貫通銃創、左胸部に刺創を根本少佐は左胸部に刺創腰部に打撲傷を受けたるところ兵士の暴力は停止する所なく自動車庫よりガソリンを持出し當館に放火し一同を焼き殺さんと放言するに至りたるを以て一同（同時に引揚遅の男在留邦人三名支那人の家に隠れ居り何れも安全なり）は死なば諸共の決心を以て十一時頃領事館裏庭に集合し掠奪兵の最後の脅迫を受け居りたる矢先偶第二軍第六師政治部主任の肩書を有する揚と云ふ者現場に馳せつけ暴軍の方針は飽迄外國人を保護し特に日本に對して厚誼を有するに拘らず無智なる暴徒が斯かる暴行をなしたる事は深く遺憾とするところなるが今後は暴徒取締を加ふべく、又た不自由の事あらば何事も申出てありたしと叮嚀なる挨拶をのべ同時に護衛兵四名當館に來たり一同慰撫を聞きたるに引續き第六師長も現場に來たり右兩人の連名を以て保護の告示を門外に貼付したるため多少安全を得たるも目下引續き殺人掠奪事件頻發し且在留官民は何れも着のみ着のまゝなり食物も菓子もなく困難窮からざるため全部第二十四聯隊に避難せしめつゝあり此の急變に際し在留官民一同終

末次研究所

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

要目		
始沈著なる態度と周到なる用意とを以て御眞影と運命を共にする決心をなし一糸紊さず行動し得たる事は本官特に満足するところなると同時に凡ゆる迫害の下に御眞影極秘書類入れ金庫の鍵を苦心隱匿して絶對安全を保ち得たる事は一に天皇陛下の御陵威に依るものにして一同の恐懼感泣に堪へざる所なり（尚日本人小學校、城内寄來館、栗林醫院及び松崎醫院は右と同時完全に掠奪をうけ軍隊の本部となり其の他金部目下掠奪中なり）因みに當館南金陵大學も昨日掠奪をうけ米國人院長外一名銃殺せられ同二名負傷し又た佛國震旦大學關係佛人二名殺害せられ天主堂は燒かれて婦人數名死亡したる噂さなるか英國側は總領事が負傷せりと傳らるゝ外被害程度不明なり		

末次研究所

宛ら尼港事件の再現！

この南京の大暴狀を見よ

我が同胞は斯の如く凌辱された

涙と血とを以て綴られた

【上海特電二十八日發天龍にて】　園田本社特派員の遭難實記

—三月二十四日南京帝國領事館は、潰走せる直隸、山東聯合軍を追擊して入城した國民軍約一個師のために、午前六時半より十一時すぎまで四時間餘にわたり、稀有の慘虐なる大掠奪の危地にさらされ、公金、重要書類、貴重品、衣類調度など一物をもあまさず强奪され、狙擊と暴行とにより陸軍武官根本少佐および木村警察署長は身に數ケ所の重輕傷をかうむり、御眞影を奉安した大金庫および特殊機密書類格納の金庫二個のみ辛うじて全きを得たほか、家屋内外の諸設備はあばら屋同樣にたゝき碎かれ、尼港事件以來全く類例なき極度の凌辱を受けた、同時に城内および下關に居住せる邦人の家屋も剩すところなく掠奪され、領事館内に避難中の居留民百餘名も身ぐるみ奪はれて、彈丸と劍戟の間をくゞり身をもつて死地を脫し、廿五日午後下關碇泊の第廿四驅逐隊の救援によりやうやく城内を逃れ、檜、桃、濱風の三艇に收容され、はじめて蘇生の思ひをなした、邦人全部幸に生命全きを得、婦人中一人の暴行を受けたものゝなかつたことは不幸中の幸で、せめての滿足である、私ははからずもこの騷亂の眞只中に直面して將に死と相距る一歩にして奇蹟的に生還するを得た、今私は上海から救援のため急航し來つた輕巡洋艦天龍の甲板に坐してあの日のむごたらしい記憶をまざまざと喚起しつゝ、この慘劇の筆をとつてゐる、私の心は未だ消えやらぬ生々しい記憶のあまりにも恐ろしさに、うち慄へてゐる——

三月二十三日—

北軍總退却を始む

その夜はマンジリもせず

暗黑と不安のうちに過した

三月二十三日午後三時半、直隸、山東聯合軍南京總司令部は江南の蘇綫金陵鎮から漸次撤退の氣なきを見て來如一番に總退却令を下すやうに、先づ總司令部、城内駐屯の海軍陸戰隊および陸軍隊をはじめに、下關より浦口に向つて後退を開始し、日没のころは人馬車洪水の如く街上を埋め、雪崩を打つて停車場より下關に向つた、この引揚げの夜こそ必ず掠奪に見舞はるべしとは何人も豫想してゐたところで、これに先だちわが居留民百十餘名のうち婦女老幼は逸早く領事館内に避難せしめ、貴重品類もすべて館内に搬入し、市中に殘つた二十餘名の男子も、いざとなれば領事館内に逃げ込む手はずを定め、日夜警戒を怠らなかつた、私は市民を離れて避難することは情報の蒐集と通信機關の獲得に不便なるべきをおもつて、最後まで寶來旅館に踏み留まる決心をなし、すべての手配を盡して起るべきことの起る時を待ち受けた、二十三日夕刻の北軍の南京落に退却を極めたもので、商店はすべて日没前から大戸を閉ちてきを潜め、そこかしこに耳をつんざく銃聲が響く中に淋漓の氣は全城を包んだ、私はこの總退却の模樣を打電すべく潮の如く寒氣襲してもの

末次研究所

み合ふ兵馬の波をかき分け、宿から一里の距離にある電報局に走つたが、この時すでに電線は切断され、同時に通信事務一切杜絶したので、通信は完全に絶望に陥つたことを知つた、日暮れてより退却の軍勢いよ〳〵數を加へ、光りを消した暗黑の街上に車、馬蹄の響きは夜もすがら絶えぬ、退却の時の掠奪の如何ばかり恐るべきかを知つてゐる私らは、いざとなれば裏庭を抜けて領事館に走り込むことにして一夜まんじりともせず、光り一つなき眞暗な部屋に息を潜めて夜を明かした、ところが案に相違して退却の騒動は午前二時をすぐるころからピツタリと止んで、その後はひつそりともこの靜けさに立返つたので、當の外れた心安さに余らも氣をゆるして、何時ごはなしに眠りに落ちたのである、不安の夜がすぎて二十四日黎明のころ、突然數發の銃聲が宿の眞下の街上に響渡つた、夜具を蹴つて飛び起き、二階の窓からのぞいて見ると、約一個中隊の軍隊が路上に散兵して二百メートルを離れた直時、山東聯合軍總司令部のあたりを逃げまどふ殘兵を目がけ盛んに射撃してゐる、たゞ見る陣頭には青天白日旗がひるがへり、幾月かの攻城野戰に軍服は破れ、頬は尖り、顏は汚れ、見るからに殺伐である、かくて拂曉を期し一齊に南京より入城した（南軍第二軍、第六軍、第四十混成軍より選抜した決死隊の一個師）は瞬く間に殘兵を蹴散らし、殺いて青天白日旗を城頭に大道を練歩るいて大いに戰勝の威を示し、戸ごとに開門を迫つた——もう南軍が來た以上は大丈夫だ——豫期された山東軍の掠奪は、南軍が餘りに短兵急に肉薄したので、その餘裕をさへ與へなかつたに違ひない、案ずるより生ひが易い、もう安心していゝ——この思ひは必ずしも私一人でなく、すべての人がかう信じてゐた

『掠奪』と氣づいた時は

部屋はピストルや小銃をもつた

亂入者で一杯であつた

そこで余は入城式の光景でも見ようと思つて服を着換へてゐると、突然銃聲一發が私の耳をつんざき、彈丸は轟然と余の寢室のガラス窓を微塵に碎き屋根裏へ貫いた、何事かといふかる暇もなく、更に立て續けに二十餘發の銃彈は窓ガラスに注がれ一發は危く余の左肩を掠め流れて天井の電球を碎いた、そのうちに暴兵の群は黑山のやうに門前に押寄せて、門を開けろ開けぬと大砲を打ち込んで火をつけるぞと口々に怒號しつゝ表の鐵門を破壞し始めた、思ひ切つて鎖前を外すと忽ち

東洋研究所

數人の荒くれた兵隊がどか〳〵と亂入して、華天兵が逃げ込んでるないか、武器は持たぬかなどと連呼しながら、泥靴のまゝ疊を踏んで家探しをはじめ、トランク一個を没收して引揚げた、この時までまさか掠奪などは無づかず平氣でるると、ついで四十數名の兵士が闖入しピストルは持たぬかと叫びつゝわれ〳〵の所持品懷中の點檢をはじめ、先づ高價な外ポケットの蓋口を取上げ、ついで內ポケットの財布をひつたくつた、その間に一人の兵は宿の女中をつかまへ、指輪を抜き取つてるたが固くて容易に脫けないのに氣をいら立て、面倒だ、指を斬り落してやるといひさま懷中から短刀を取出してあはや左の藥指を斬り落さうとする、女中は必死に抵抗しつゝ、やうやく脫き取つて渡した、かうして掠奪だと氣がついた時分は、部屋部屋はいづれもピストルや小銃の引金に手をかけた亂入者で一杯で、入れ替はり立ち替はり現れて來て凄文句で脅しつけながら掠奪してゆく、少しでも抵抗の氣を見せやうものなら、直ぐ樣銃殺する面構へで引金に手を當てゝ迫つて來る、私は無抵抗の如何に悲慘なるかを體驗し、生來二十八年、この時ほど自分が弱いものゝ思つたことはなかつた、しかしがうなれば死を決して暴徒のなすまゝに天運を待つほかはなかつた、そのうちに私らは外套、服、ワイシャツ、着てゐるもの全部を剝取られ、ズボン下一つきりになつたが、暴兵は刻々にその數を增すばかりで取つて行くものゝなくなつた頃立たしさに、室內の小道具類を片つ端から破壞しはじめ、百元出せば命だけは助けてやるとか、驚作芝ひいきの日本人は殺されたなどとわめきながら、一人の兵は一間私の間近からピストルを向けて私を狙撃した、幸ひにして彈丸は余の眉間を掠め戸を貫いて隣室の壁にあたつた、一緒のもの四人すでに生きた心地はない、どうでもなれと觀念の臍を固めてゐるうち、兵隊に續いて潮の如き無賴漢の群衆が雪崩れ込み、口々にわれ〳〵を嘲弄しながら、家の中の品物を片端しから持出してゆく、目覺ましいものはもちろんのこと、後では疊表、床板、便器、鐵瓶のかゝつた火鉢、たん壺に至るまで持去つて、部屋の中はまるで厩同樣の破屋となつてしまつた

末次研究所

『日本人は皆殺す』

『覺悟しろ』と小銃を女中の心臓部に据ゑた

私らはさる縁になつてその暴虐を目のあたりに眺めながら、どうなるかと臓を煩てゐるこ、やがてどかどかと數人の兵が飛び込んで來て『貴様らは支那の土地に勝手に家を建る權利はない、早く出て行け、下て銃殺してやるから早く行け』といひ捨てゝ私らを引きずり出した——いよ〳〵最後の時が來た、もうもがいても、わめいても駄目だ——こ觀念し、彼らのなすがまゝに引き立てられて階下のボーイ部屋に押し込められた、そこで暴兵らはまたもや悲鳴を擧げて拒む女中を取り押へ、腰卷きまでも取らうとする、これを見た余は思はず眼が眩んだ——凌辱でもしてみろ、その時は刻を奪ひ取つて斬殺してくれる——こ決心してゐるこ、幸ひにそのまゝで出て行つてしまつた、これよりさき、危險がいよ〳〵身迫に迫つたのでこのまゝでは暴徒のために殺されるばかりだこ思つたので、ボーイを密使に立てゝ急を領事館に告げしめ樣宜の處置を請ふた、宿から領事館まで二十町の道程であるが、ボーイは待てこ待らせこ待らぬ、やつこ十時すぎになつて歩つて來て『領事館も大掠奪を受けてゐる、兵隊が一杯で、とても行けぬ』こ告げた。——まさか領事館がやられるはずはない、後難を恐れて途中から逃げ歸つて來たのかも知れぬこの上は命をかけて領事館に逃げ延びるよりほかに途はない——こ考へて、裏口から脱け出やうこしてゐるところに、またもや鬼のやうな兵隊が十數人押寄せて『日本人は全部銃殺するから用意しろ』に割れ鐘のやうな聲で銃殺を宣告し、壁際に引き据ゑて、先づ小銃の狙を女中の心臓部に据ゑた忽ち暴徒は引金を引いた、すると天佑か彈丸は裝塡してなかつたゝめ空しくもカチリこなつたゞけで、生命はやうやく絶たれんこして一際を殺した、暴兵はいま〳〵しげに舌打ちして氣を取立てながら彈丸を裝塡してゐるこころに、突如中佐服をつけた將校が門の前を通合せ、この有樣を見るや否やツカ〳〵こ入つて來て、兵士の肱をつかんで制止したので、余は危機一髪のこころで死を免れた

支大研究所

が、暴兵はいまく〳〵に脱みつけて立去つた、私は地獄で佛に逢つた氣持ちでこの將校をつかまへ、このまゝでは何時殺されるか分からぬので一刻も早く脱出して領事館に避難したいから、どうか護送していただきたいと願願すると、將校はそれでは後で警察署長を出すから、それまで待てといつて傍の巡査に自分の名刺を與へ、裸で慄るへてゐる私らに着物を貸してやれと命じて立ち去つた、三十分の後巡査部長が來て、巡査に二人で私らを護送してくれることになつたので、私はズボン下一枚の上に巡査が苦力の着てゐたのを脱がしてくれたボロ〳〵の上衣一枚を肩に當てたまゝ、街上に出た、黒山のやうに取り卷く彌次馬の中には糺察隊のマークをつけた學生が混つて、『そいつらを引渡せ、渡さぬと貴樣らを殺すぞ』と幾度か巡査を脅し私らを拉致し去らうとする、やがてとある病院の前にさしかゝると、石臺の上に生々しい血潮が流れ碎かれた腦漿が散亂してゐるその門の直く傍で外人の紳士二人が兵隊に取り圍まれて將に銃殺されようとしてゐた、これを目擊した我等は自分の運命を告げられてゐるやうな氣がして、われにもあらず眼の前が眞暗になるのを感じた、そのうちにやうやく領事館の建物が見ゆるところまで來ると、正門前の路道を兵士や無賴漢の群が押し合ふやうにして家具類を抱かかへて降りて來る、見れば門前には公用書類が大地を埋めて地に亂れてゐる—領事館もやられたのだ—はじめて眼のあたりに見て、私は思はず鐵槌になぐられたやうな驚きを感じた

全身血を浴びて
倒れた根本少佐と木村署長
鬨を揚げて押寄せた暴兵

日本領事館内に入つてみると館内の建物は目茶々々に破壞され、その混亂狀は目も當てられぬほどである、その中を無數の無賴漢や兵士がなほ盛んに器物を破壞したり發掘して暴れ廻つてをる、邦人避難民は荒壁を領事館の裏庭に敷いて難を避け、乳飲み兒が火の出るやう

末次研究所

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

に泣き叫ぶ傍に根本陸軍武官と木村警察署長とが全身血を浴びて打倒れてゐる、それは予が嘗て見たことのない凄惨な場面で應急手當さへしてゐない、兩氏の傷口からは泉の如く血が滾々として湧き出て來る、銃聲はなほ耳近くでけたゝましく響く、本館の方では暴徒らがまだ家具類を奪ひ去り打碎く音が起り不安に戦く一同の胸を脅かす、予はこゝに惨として聞くに堪へぬ領事館遭難の詳細を物語る必要がある、南京城内居留民百十五名のうち、山東軍退却時の兵亂を慮つて婦女子は逸早く領事館内に避難させ、下關碇泊の第二十四駆逐隊より先任將校以下十一名が出動して警備の任に當つてゐたが、山東軍の引揚が意想外に本隊にすぎたので、人々は慌てを開いて門前に築き上げた土嚢も取除け、小銃三十挺、機關銃一挺も形づけてやゝ警戒し解いて寝についた、翌二十四日午前五時半ごろ殿兵を追撃した支軍の一部は領事館前の道路廣場に集合を碌んに小銃を撃つてゐた、南軍が來た以上はもう大丈夫と正門を開いた、すると門を開くと同時に數名の兵士が駆け込んで來て、逃亡兵がをらぬかと部屋中を捜索してそのまゝ引揚げたそれから約三十分もたつたかと思しころ百餘名の兵隊が鬨の聲を擧げて館内に殺到し來たり折柄正門には西原二等兵曹が歩哨に立つてゐたが、事態不穏と見てこれを制止すると群衆は同兵曹に銃を擬し、「やつゝけろ、やつゝけろ」と連呼しながら外套越しに銃劍で突きまくり顔面や頭部をめつた打ちに打ち据ゑた、西原兵曹の危難を見た警備隊の數名が駆けつけると、群衆は有無をいはせずぶつ取り囲んで、手取り足取り各人の身體を點檢し兵器も裝身具も無理無體にもぎとつた

我が領事館内は
木つ葉微塵の惨狀

殘忍を極めた掠奪

陸戰隊涙を呑み隱忍

これより先警備隊長荒木大尉は反抗は徒らに避難民全部を尼港事件同様の屠殺に陥らしむるだけだから、一切手向ひせず、暴徒のなすがまゝにせよと命令したので、陸戰隊の兵士はいづれ

末次研究所

も涙を呑み切歯扼腕してこの暴行を隠忍自重した、かくて暴徒の群は三手に分れて本館、事務所、別館に向つて嵐の如き猛烈なる叫聲を挙げつゝ襲撃した、事務室には殆ど女子供ばかりで、四十名餘り避難してゐたが、正門を突破した暴徒は先づ小銃を亂射しつゝ突喊し來り、直に階下の電話室に入り電話機を木ツ葉微塵に碎き、そのまゝ各室の器物を掠奪或は破壊し始めた暴徒襲來と聞くや、避難民は一覧に來り、要求するものはすべて渡してしまふことを申合せ、暴徒のなすがまゝに任したが、掠奪兵の群は次から次へとその数を増し、財布、指輪、時計などを手始めに衣服、毛布、トランクなどを手當り次第に奪ひ取り、更にその後に來るものは金を出せと迫りつゝ婦人達の髪を解かせ、足袋を脱がせ、帶を解かせ、或る婦人の如きは下帶まで丸裸にされてしまつた、抱かれてゐる乳飲兒の玩具、帽子、靴下までひったくつて洗ひざらひ持去り、その揚句漸團、家具類をこん〳〵迫び表に待たせた自動車や騾馬に滿載して、その中いよ〳〵取るものがなくなつてくるこ、先から手擲彈を投じたり、小銃を撃ち込んだりして破壊してゐた大型金庫を開けよと迫り、盛んに發砲して阿修羅の如く兇猛の限りを盡くした、こゝに起居してゐたものは女子供ばかりなので、掠奪劇しさを加ふるにつれ、混亂はその極に達し、母親は髮を振り亂して細帶一つで子供を負つて逃げまどひ、子供は父母の名を呼び火のつくやうに泣きわめき、阿鼻叫喚の惨狀を呈し、正視するに忍びざる惨憺たる場面を現出した、さうする中に無頼漢の大群衆が押寄せて殘された家具類、調度品を何もかも持去り、ストーブ、便器、屑物に至るまで殘るところなく掠奪して行く、この間に避難者は裸足のまゝでガラス、茶碗の破片の散亂する中を踏越ねて漸く表に逃げ延び、露にぬれた枯草を片敷いて乳飲み兒を寝かしつけてホツと一息ついた

【以下二の面へつゞく】

掠奪兵を銃殺せよ

共産黨南京支部解散命令

南京森領事からの報によれば程潛氏は蔣介石氏から今回の掠奪兵を發見次第殺せよとの命を受くるとともに共産黨南京支部の解散を命じ黨員の鎭壓に努めてゐるがまだその効がない（某所着電）

末次研究所

南京掠奪事件詳報【一の面より】

領事奇蹟的に助かる

銃丸は衣服を掠めて疊へ

『金を出せ』と武官を刺す

暴徒事務室に來襲したと聞くや、木村警察署長は御眞影奉安の室に闖入のおそれありと見てこれを致ふべく馳せつけ、更に本館に報告すべく引返す途中一人の暴徒は同氏の斜め後から狙撃したため署長は右腕に骨膊貫通傷を受けたが、そのまゝ勇を鼓して本館に逃げ延びた、暴徒は先づ數發の小銃、ピストルを發射して威嚇し、各室に闖入すると同時に逸早く電話機をたゝき壞してさかくゝと領事の寢室に亂入した、森岡領事は永らくの足部の動脈硬化症で病床にあつたが、暴兵はドアを拔して室に入るとより早く銃を突して狙ひを領事の頭に定めて發射した、彈丸は奇蹟的に領事にとり添つてゐた夫人の僅かな隙間を殆ど衣服をすれすれに掠めて疊の中に突入つた、發砲はそれに續いて室内で亂射され危險極まりない、その中に暴兵らはいよ〳〵掠奪を始め、まづ事務室の電話機を破壞して後、各人の携帯品を始め、裝身具、衣服から書類、家具などを持去り、持去れぬものは片端から打碎き、領事使用の十型金庫は無慘にも鐵棒にて打壞され、中身は紙一片殘さず奪去られた、暴徒は數を增し、次第に不穩の形勢を加へて來た、「金を出せ」「金庫を開け」と人々は片端から拉し去られて金庫室に連込まれ金庫の文字盤が狂つてこうしても開かぬのに業を煮やし、銃を振へて暴行を加へる、根本武官、板坂民會長、山本訓導らはこの犧牲になつて銃把で亂打され、身に數ケ所の打撲傷を蒙り、特に根本武官の如きは脇腹をあたり構はず猛打され、そのまゝ寢室に轉け込んで打倒れた、それを追つて數人の暴徒はドカ〳〵と雪崩込み、「金を更に百元出さねばすべて殺す」と矢継ぎ早の文句を並べ、「金はもうこの上一文もない」と聞くや否や銃劍をきり直すと見る中に打倒れてゐる根本少佐の脇腹をブスリと突き立て、返すきつさきで腕を拔れ傍に倒れてゐる木村

末次研究所

署長の脇腹を突いた、根本少佐の傷は服越しとはいへ、きつさきは服、シャツを貫いて長さ二センチ、深さ八分の刺し傷で、血は滾々と身を染め、惨憺にも重傷にひるむ同武官を一階の窓から突き落した、あはやといふ間もなく、轟け落ちて下の貯水タンクに落ち人事不省に陥り、一同は命からく本館裏の空地に逃げのび、漸く事務室および別館にあつた被害者一同と落合ふことが出来た、一同一人残らず裏庭に落ち延びた後も暴兵らは入れ替り立替りやつて来て「殘つてゐる二つの金庫の鍵を出せ、あれをあけぬことゝにゐる奴全部を惨殺するぞ」とか「今夜は石油をかけて建物を焼撃ひ、貴様らを一人殘らず焼き殺すぞ」とか脅し文句を並べるので、女子供は堪ゝ上つて生きた気持はない、その中に領事の忠實なボーイが危険を冒して饅頭を運んで來て湯を沸かしてもつて來たが、誰も湯一杯で咽喉に通らず、湯を呑もうとしても、缺け茶碗一つ殘つてゐず、僅かに煙草の空罐などもつて皆飲み合つた、かれこれしてゐる間に第二軍政治部員楊勲、第二軍の師團長郭岱兩氏が前後して來訪し口先だけは大いに遺憾の意を表し、部隊から保護を加へるから安心されたしと述べ、必要器具、衣服の提供を申出で、「在留外人の住居に立入るべからず、もし行ふものあれば直ちに銃殺する」との貼紙十枚を書き與へ、二人の署名捺印をなした上引去つた

今夜限りの命か

寒さと飢ゑとの中に

不安に慄える同胞百餘

乳を求めて泣き叫ぶ赤兒

その後で直に五六名の歩哨が立つてやゝ秩序恢復したため一同は一片の装飾すらないあばら家同様に荒れはてた領事館接間に寒やあんべらを敷きつめて病人、乳飲み兒を寝かしつけた、こゝで早速心配なのは食糧品の用意であるが、皆のあり金を掻き集めてみても三十元に足りぬ、で先づこの中から燒餅、饅頭をボーイに買はせに出し、缺け茶碗を集めて悲惨なる夕食を仕度した、食料品買集めにしても中々思ふやうにならず歩哨兵に保護を頼んでも、「食糧がいるものか、今晩の中には皆殺されるんだから、食ふ必要はあるまい」などゝ脅すので、不安はますく強るばかりだ、やがて四時近い時分と思はるゝころ、遙か下關の方向に當つて轟然たる砲聲が響き、家屋を振動させた、裏庭から見れば下關

末次研究所

の軍艦より發射されてゐるものらしく、砲彈は英國領事館の近傍に落下し盛んに土煙を上げるのが手にとるやうに見える、大砲發射と同時に領事館の附近に群つてゐた兵隊も歩哨も皆引揚げて戰爭準備を始めた、大砲は下關碇泊の軍艦から發つてゐることは明かで、英米だけなら兎も角日本もこれと共に火蓋を切つてゐるとすれば、我々は必ず行きがけの駄賃に虐殺されることは必定だといふので一難漸くさればまた一難來る不幸を思うて、皆生きた氣持もない、砲聲は殷々として百數十發續けざまに發射され、極度の不安の裡に日はどつぷり暮れる、暴徒の殘した僅かな燃料をマントルピースに焚きつけてみたが、ひしひしと攻め寄せる寒さは凌ぎやうもなく、辛うして得た一二本の蠟燭はユラ〳〵と明滅して胸もつまるやうな陰慘な氣は迫り來たる、避難者百十餘の中五十二名は頑是ない子供で、中十二名は生れて半年もたゝぬ乳飲み兒で乳房をふくませる母親の乳は出ず、さりとてミルクなどあらうはずはなく、又ぬれても取り代へるおむつ一枚あるではなく、むづかる赤子ははりさけるばかりに夜通し泣き叫び甚だしきは肺炎に陷され、今まで吸入をやつてゐた子供は次と人いきれのために病勢が昂進し、焼けるやうな高熱で火のつくやうに泣く、全く腐わたをズタ〳〵に斷たれるやうな酸鼻の極みである、今朝の恐ろしさ、次ぎの瞬間の生命の不安など細細と語り合つて、一夜まんじりともせず夜を明かす中、漸く不安な一夜は明けて二十五日となつた、今日どうしても下關の鐵路と聯絡をとらねばならぬ、一刻も早く聯絡をとつて脱出の方法をはからねばならぬといふので一同加藤首會議を開いた結果食糧および藥品買入れの名目で下關に代表を走らせることゝし、荒木大尉と私の二人が自動車を驅つて城門突破を決行することゝなりその許可を得るため幾賀游記生は司令部に戴帥團長を訪れた

要目		

本文研究所

『おゝ生きてゐたか』

吉田司令の頰に涙の瀧

救はれた刹那の歡喜

南軍の暴行は計畫的

かれこれして時を移してゐるところに、突然一台の自動車がとまり、海軍の制服をつけた一人の巨漢が館内に躍り入つて來て、闇を排して入り來ると共に「おゝ生きてゐたか」と領事の手をひづこつかんで、日焦けした大きな顏に瀧のやうな涙を流した、見れば第二十四驅逐隊司令吉田中佐ではないか、中佐の背後には松浦大尉、三上通譯外士官一名、水兵四名が從つてゐる、この時の一同の氣持は予の禿筆では到底傳へることは出來ぬ、皆一齊に抱合つて感激の涙を呑んで歡呼の聲を揚げた、婦人の中には感極まつて大聲で泣くものもあり、實に稀に見る劇的場面を演じた、聞くと下關警備隊は城内の消息が全く不明なため極度の不安に包まれ、ハルク防備の後藤三等機關兵曹が暴兵の狙撃で殺されたほこの言語に絶するあらゆる暴行も城内の人々の生命の安全のため涙を呑んで隱忍したもので、今日こそは我々の生死を確かめた上、もしもの時は斷然たる行動に出づる決心を定め九十名の陸戰隊を上陸させ、桃、槍、激風はいづれも砲口を城内に向けて撃つばかりの準備を整へ、司令自ら決死隊の先鋒として六名の部下と共に合圖の烽火を携へて乘込んで來たのである、掠奪兵は二十元の懸賞で募つた決死の暴兵で、おまけに掠奪すべき家は早くより共產黨南京支部の手によつて逐一調べ上げられてゐたもので、特に英人に對しては極度の憤怒を抱き、領事館は滅茶々々に破壞し、城内に居留するもので殺されたものは數を知らず、中には殺された上頭髮、陰毛を焼いて小便を浴びせ放棄された殘虐な觀物者もあるといふ、その卷添へで米國領事館も敢々にやられ、金陵大學の副院長米人一名殺され、三名の居留民は重傷を受け復旦大學の豫科部教授の佛人二名も敢なく虐殺の悲運に遭つた、日本側の掠奪にも眞先に平服を着た青年や斷髮の若い女が陣頭に立つて指揮するのを目撃した、司令の話によれば、二十五日夕も英艦は城内を砲撃するといふので一刻も猶豫を許さない、それで司令は直に楊杰(第六軍師長)を訪問し、脱出のため保護と交通機關の準備とを要求し女子供から順次に送り出し、午後六時までに日本人全部完全に下關に到着し驅逐艦三隻に收容され初めて安全な自分達の姿を見出すことが出來た

末次研究所

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com